

普通期水稻 田植から中干し前後管理

～田植え後管理の徹底により丈夫な稲を作ろう～

本年は入梅が早く（5月11日20日早い）天候に注意が必要。梅雨が多い年は、いもち病、海外飛来害虫の飛来回数が多くなり、雨が少ない年は、害虫、雑草の発生が多くなります。気象によって変化しますので対策をお願いします。

1. 田植後の管理

(1) 水管理	<p>① 活着促進のため<u>田植後3日間は水を切らさない</u>ように管理する。</p> <p>② ジャンボタニシ多発田では<u>浅水管理を行い、絶対に干しあげない!</u></p> <p>③ 田植後3日頃、除草剤散布前に、土中の有害ガス抜きも兼ねて<u>3日間程度軽く落水</u>する。その後は<u>間断灌水（灌水4日、落水3日）を繰り返す。</u></p>
(2) 除草剤散布 (水稻暦参照)	<p>初中期除草剤を使用する場合は、<u>基本は散布後7日間は深水で散布し、最低でも田面が見えない程度</u>の水を溜めておく。また、<u>散布後7日間は落水させない。(長いほど除草効果が高くなる)</u></p> <p>初中期除草剤散布後、雑草が生えてくる場合は<u>中後期除草剤を散布する。(落水が早いと効果も早く切れます。)</u></p>
(3) 病虫害対策	<p>① <u>いもち病・・・曇雨天や低温が続く場合は十分注意すること!</u></p> <p>田植後に<u>余った苗（置き苗）が第一の発生源</u>になるため、植えつぎが済んだら<u>置き苗は早急に除去する</u>。また、育苗期間中にいもち病が発生していた場合は、<u>葉いもちに十分注意</u>する。</p> <p>◎<u>いもち病本田防除薬剤</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>ノンプラスフロアブル</u> 1,000倍液（2回以内 収穫7日前まで） ・ <u>ブラシンフロアブル</u> 1,000倍液（2回以内 収穫7日前まで）
(4) ケイ酸加里の施用 (田植え前に散布している場合は不要)	<p><u>出穂45日前(中干し開始頃)を目安にケイ酸加里30kg/反を必ず施用。</u></p> <p>ケイ酸加里の施用により<u>病虫害や夏場の高温に負けない丈夫な稲体</u>になる。昨年のような夏場に高温が続く場合でも、<u>稲体自体の温度を下げる効果や、気温が低く日照時間が少ない条件下でも、光合成能力の向上</u>により十分な養分を生成し蓄えることができる。</p> <p style="text-align: center;">登熟向上のために必ず施用しましょう!!</p>

2. 中干しの時期・方法（最重要）

◆中干しの重要性

中干しは稲作りにおいて最も重要な基本技術。中干しが出来ていない田んぼで高品質・高収量は目指せない。中干しの重要性をしっかりと認識し確実に実施することで、中干し後の管理が適切に行える。

◆中干しの効果

- ①過剰分けつ抑制 ②土中の有害ガスの抑制 ③根を深く張らせる（根量増加）
- ④追肥が十分できるよう余分な窒素抑制 ⑤幼穂形成期の均一化（穂揃いを良くする）

◆中干し開始の目安

1 株分けつ本数が平均16～18本になったら開始する。（完全落水、排水栓抜き実施）

1 株茎数が多すぎると倒伏や屑米増加の原因になります。

◆時期の目安・方法（田植え後30日頃が目安）

- ①夢つくし＝7月15日頃から ヒノヒカリ＝7月20日頃から行う。
- ②約7～10日間実施し、少しヒビが入る程度に行う。
- ③田んぼが白乾状態になった場合は、中干し中でも走水を行う。
- ④砂地は、一度に強めに行わず、2から3回に分けて行う。

農薬散布は基準を守り、周辺作物への飛散に注意する！！

農作業事故には十分注意して作業を行うこと！！

栽培履歴の適正記帳・収穫前の提出を必ず行いましょう！！

問い合わせ 農畜産課 327-3912